自閉症児を対象としたダンス・ムーブメントプログラムの試み

和光大学　大橋さつき

1．活動の背景

〈対象児について〉

対象児男子（6歳）は，発達の遅れから何度か医療機関を受診していたが，正式に自閉症と診断されたのは4歳4ヶ月の時であった。その後，専門的な療育を求め，ムーブメント教育を受けることとなった。特に，コミュニケーション能力に問題があり，意志の疎通が上手くいかず，他人と関わることができずにいた。また，物への執着があり，こだわり行動も見られた。

〈ムーブメント教育について〉

ムーブメント法は，子供の自主性，自発性を尊重し，動く喜びの中で，「体－頭－心」の調和のとれた発達を図るもので，米国の Marianne Frostig 博士らによって体系づけられた。国内では，小林芳文博士を中心に普及しており，既に障害のある子ども達の教育に有効であると評価されている。MEPA（Movement Education Program Assessment）と呼ばれるアセスメント法が確立しており，循環的なプログラム構成に役立てることができる。

〈活動開始までの経緯〉

対象児が，ムーブメント教育の集団プログラムにうまく参加できないことから，個別プログラムが必要とされた。模倣動作の習得に重点を置くために，既存のムーブメント法にダンスの特性を加えたプログラムを行うこととなった。動きの質に着目するために，MEPA に加えて，KMP（Kestenberg Movemente Profile）を活用した。（KMP は，英米のダンスセラピーにおけるアセスメントとして利用されており，動きを理解するための項目が多岐に渡って分類されている。）

2．プログラム内容

〈開始時のアセスメント〉

MEPA によると，3歳の発達段階にあることが判明した。また分野別にみると，運動・感覚分野に比べ，言語・社会性の発達が遅れていると判断された。KMP では，テンション・フローの観察の結果，漂うリズムが芽生えている時期であり，吸うリズム，噛むリズムへの執着も見られた。空間を捉えるシェイプフローにおいては，前後の方向性が未成熟であると判断された。

〈目標設定〉

（ア）運動・感覚面を利用して，言語・社会性をのばす，（イ）他者と関わりながら動くことを理解する，（ウ）集団プログラムへの適応，を長期の目標として設定し，短期では，身体意識・空間認知（特に前後方向）の強化と模倣動作の習得を目指すこととした。

〈活動内容〉

合計24セッションを実施した。活動場となる地下室には，様々な遊具を用意した。多少の変動はあったが，基本的には，まず，自由に遊ぶフリームーブメントでその日の様子を把握し，歩く・走る・跳ぶなどの基本活動を軸にダンスムーブメントへと展開させた。

〈記録法〉

筆者自身が活動中関与しながらの観察で得た記録を中心に，VTR での記録を補助的に扱った。また，日常生活での関係を把握するため，通園施設での記録や家庭内での記録も参考にした。

3．結果と考察

活動記録より以下の4つのターンに分けて考察した。

〈①信頼関係の構築〉

始めは，関わり合いを避け視線を合わせようとしなかったが，次第に，動きの儀式とも言うべき，遊びの決まりごとが出来てきて，その中では，関わり合うことを楽しむようになってきた。

〈②情動調律―身体の共振―〉

音の共鳴のように，互いの身体が同時に共振しあう情動的なコミュニケーションをより多く展開できるようになると，表情も豊かになり，言語的指示も通るようになってきた。

〈③模倣遊びへの展開〉

共振する身体を体験できるようになると，模倣遊びが展開できるようになり，目・鼻・口などの身体部位を指す真似から，簡単な模倣ダンスまで，多くの模倣動作が可能となった。

〈④攻撃性から情動調律へ〉

情動的な交流が増えると，愛着関係が確立し能動的に関わりを求めて動くようになり，健康的な自己愛が高まった結果，強い快の衝動興奮が攻撃的な行動となって現れるようになった。今後は，次の発達段階に向けて，攻撃的に見える行動とその要因について慎重に把握した上で，それらをしっかりと受け止め，より穏やかな，望まれる動きで投げ返していくことで，情動の調整を目指すべきだと考えられる。